嬉泉の新聞

嬉泉の新聞／第16号／1990年（平成2年）6月発行（年3回発行）
発行所＝社会福祉法人嬉泉・東京都世田谷区船橋1－30－9（〒156）
ＴＥＬ03－426－2323
発行人＝石井哲夫　　編集人＝友田篤

入居型施設と地域センター

飯田　精一

戦後間もなく，私は戦前から生き残った障害児のＫ施設を訪ね，そこで強烈な印象を受ました。当時はいわゆる食糧難の時代でした。世の中の人々は如何にして食糧を獲得するかに懸命でした。Ｋ施設でも亦サバイバルに全力を傾注していました。先生も園児も一緒になって，自分たちの食物を自家生産していました。米，麦，大豆，野菜等を開懇畑で栽培し，精米機や精粉機を動かし，豆腐やみそ醤油までみんなで作って食べていました。衣類も古着を自分たちで仕立て直して着ていました。当時は戦時中の自給自足という言葉が未だ残っており，公の補助金という援助も不充分な時代でした。

しかしそうした中にも，Ｋ施設の生活には活気とゆとりが漂っていました。園舎はすでに老朽化していましたが，掃除もゆき届いて，板張りの老化はピカピカに輝いていました。古い汽車の客車を改造した理髪店も開店していました。手づくりのブロックを積み上げた教会堂も聳え立っていました。緑の木立ちに囲まれた空間は子どもたちの豊かなオアシスでした。こうした環境の中で，言葉のない重度のちえ遅れ児たちが，日本製粉の紙袋作りの仕事をしていました。私にはとてもまねのできない正確さと速さで立派な製品を生産していました。ここは各種の生産活動の場でもありました。この施設は計画的にでなく，いわば自然につくられた生活共同体でありました。私は深く感銘を受けて，自分も障害児たちと一緒に，このような生活をしてみたいとおもいました。

それから十数年経って高度経済成長期を迎え，世の中も随分と変わりました。私はたまたま機会を得て，東京のど真中で，障害児の任意な地域センターをつくる仕事に携わりました。当時は未だ地域センターという言葉もなく，入居型施設が各地に増設されつつあった頃でした。私は地域の子どもたちが家庭に在宅のまま，通所方式で援助を受けることが良いのではないかと考えました。そしてセンターを拠点として，地域自体をＫ施設のような障害児の共同体としたいと考えました。しかし理想と現実とは一致しないものだということを身をもって体験しました。私たちのセンターはたちまち資金難に陥りました。地域ケアの必要を訴えても当時は耳を貸す人さえありませんでした。このセンターが潰れるのは時間の問題だと噂されました。センターのサバイバルに励む日が続きました。それから二十数年が経ち，今では地域ケアの重要性を疑う人は少なくなり，私たちのセンターもなんとか存続していけるようになりました。デイケアと共に，緊急一時保護のニーズに応じられる設備と人材も整いました。これからは地域のグループホームがほしいと願っています。あらゆる生活のニーズに集約的に応じられる入居型施設と違って，地域センターでは地域の福祉資源を有効に活用することによって成り立ちます。Ｋ施設の夢を追いつつ，これからも緩慢な歩みを続けることでしょう。

（日本社会事業大学教授）

最近感銘を受けた話がある。日本社会事業大学の理事長である伊部英男先生が、最近強調される事で「企業福祉」という話しである、経済成長後の我国が諸外国の借款に応じたり、企業協力を行っているにも関わらず、その国際的評判は、あまり芳しいものといえないようである。その原因の一つには海外進出を行った企業の社会福祉認識に問題があったようであるというのである。その辺の事情については私も余りよく分からないが、日本人の海外事情についての認識の低さからも来るもののように思われるのである。伊部先生はこれを国家の成り立ちから説明されている。はじめに国の政治があって地域社会が動くという日本と、はじめに地域社会があって国家の政治が動くという欧米諸国との違いがあるという事。すなわち日本の国内の企業は、国政に直結して展開してきて地域社会には公害をもたらしても、余り意に介さなかったところがあったが、欧米諸国においては地域社会への福祉的配慮無くして企業の発展がありえなかったという。この辺の海外進出の企業の地域への福祉配慮に欠けていた所なども問題とされていたように思われるのであろう。

これからは企業の福祉配慮を担当していくソーシャルワーカーの養成が必要になってくるという考えなのである。まことに卓見と言うべき事であって、啓発されるのである。さてここからが私の出番で、この企業を社会福祉施設という言葉に置き換えてみたらどうなる事であろうか。

社会福祉施設は長い間親方日の丸でもっぱら国の方を見ていて地域社会の方に向いていなかった、つまり福祉施設はあっても施設福祉が無かったのである。（施設福祉という言葉はこのような使い方をしていないが、）我国の地域福祉は、どちらかと言うと社会教育と言うような意味で使われていたようであったが本来は施設福祉だったのであった。社会福祉施設が地域の篤志家であった頃は、地域の人達から尊敬されていたが、国からの費用負担が多く行われるようになってからは、地域住民との間に溝が深められたように思われるのである。今年は社会福祉事業法の改正が行われるべく目下国会に上程されているのであるが、これが通れば社会福祉施設に地域福祉へのサービス機能が求められるようになってくる事になると思われるのである。

さてこの辺で結論を述べるとすると、これから社会福祉機能としては、地域住民の緊急福祉要求に応えられるような処遇である。地域で困っている人達のための対応を行う事であり、今地域にはどのような福祉ニーズがあるのかを明らかにしていく事であろう。職員の目を施設内に止めずに地域社会に向けて広げていく事であり、そして施設内の福祉機能を地域に向けるような意図的な改革に踏み出す事であろう。

どうも、今までの社会福祉施設関係者は、無意識的に「自分はよい事をしているのだから地域の人がもっと自分を尊重してくれても良いのではないか」という一種の甘えがあったようである。そして社会福祉施設という密室の中で入居のプライバシーを盾に採って、好きかってな事もしていたような所もうかがえたのであった。やはりどこへ出しても恥ずかしくない施設処遇と施設運営の実践に心がける事が必要になってきたのである。つまり施設周辺の住民がこの施設の福祉機能を利用したいという気持ちが高まるような地域への施設機能の出前を考えていくようにしていかなければならないのである。今私たちが袖ケ浦地区で実践しつつあるパン販売や焼き芋販売は規模は小さくとも地域の人達に喜ばれている事であるし施設の利用者たちが地域の人達にごく自然につきあって行けるようになっていくのではないかと期待できるのである。そのためには、施設の職員の社会化活動の積極化が期待されるのである。思えば今療養中である小野法郎氏が青年部を担当してから町の喫茶店主や成恋がまや青年学級などという地域の社会資源の積極的活用を行った事が忘れられない事なのである。社会福祉施設は地域社会との境界を厚く、かつ堅くしないようにしなければならないのであって、地域社会を含めて施設と考えての施設運営に心がけるくらいがよいと思っているのである。

施設経営の創造性（その七）

石井哲夫

私たちのしごと

須藤福祉センター各事業所からの報告

袖ケ浦のびろ学園・ひかりの学園医務室

高橋彰彦

一、組織と運営

のびろ・ひかりの学園には、それぞれに医務室があります。医務係として両施設合わせて三名の看護婦と一名の非常勤医師（精神科医）とがいます。しかし、のびろ学園の医務室には同時に「のびろ学園診療所」という医療法上の無床診療所として届け出をした医療機関でもあります。医師がいる時は両学園の利用者と職員に対して外来診療を行い、必要に応じて施設内に往診するという形で仕事を行っています。

福祉施設の医務係という役割は、診療所としての医療義務という限定されたものばかりでなく、利用者、職員の健康管理、保健衛生業務を、看護婦が中心となって行います。これは非常に広い範囲にわたる仕事で、施設の医療職員だけでは十分に行うことができないので、周辺地域の医療機関、医師や保健所などの協力を仰いでいます。

嘱託医として、佐野医院（のびろ）、田中医院（ひかりの）を委託し、さらに救急医療と脳神経外科（さつき台病院）、外科（袖ケ浦病院）、皮膚科（古川医院）、眼科（飯田医院）、耳鼻科（小関医院）、整形外科（安部医院）などに診療をお願いし、また定期健康診断は国分眼科、加藤歯科に依頼しており、検便は保健所で行っています。

その外、入所前から特定の医療機関にかかっていた人も多く、そこから薬をもらって服用を続けている場合は、それらの医療機関と常に連絡をとって処方内容について把握し、また必要に応じては主治医に状態を報告して処方の変更を協議することもあります。

このように、医務の仕事は外部の機関や医療関係者の協力によってはじめて円滑にすすめることができるもので、そういう対外折衝をうまく行うことが特に大切なことになります。

二、仕事の内容

医務室の一日の仕事は、朝の健康チェックから始まります。昨夜からの発熱、睡眠不良その他の異常を早く当直者から聞きとり、診療を受ける必要があるかどうかをきめなければなりません。また、皮膚疾患や外傷がある人には日課が始まる前に処置をすることが望ましいので、できるだけ処置をすませるようにします。その後、その日の薬を一人づつについて一日分を朝、昼、夕、寝る前、に分けて服薬の間違いがないようにします。月曜日には大勢が一斉に戻ってくるので、家庭からの連絡帳を見て、家での健康状態を知り、体の具合が悪い人には、診察の手配や状態の観察をしなければなりません。

外部医療機関に診察を受けに行くには、先ず行き先の医療機関の都合を確かめ、診察時間の予約をします。できるだけ待ち時間を少なくするためには、時間を正確に守って行かなければならず、そのためには自動車や付き添いの手配を早めにしておく必要があります。また、診療を受けるには保険証や受診券を確実に用意しなければならず、平常からそれらの書類の有無や有効期間などを確認しておくことも重要な仕事です。

学園の医務の仕事の特徴の一つは、外傷、皮膚疾患の処置です。処置をしてもすぐに包帯や軟膏を取ってしまったり、傷口を自分で掻きむしってしまったりしてなかなか直らないことが多く長期間かかり根くらべになることがしばしばです。そういうことへの対応をも含めて、望ましい健康管理のためには医務職員だけではできず、学園の職員の協力と応援をお願いしています。

（袖ケ浦のびろ学園　医師）

嬉泉の出来事

メキシコとの交流

メキシコのインテルコンチネンタル大学教授で付属の自閉症児療育センターの所長でもあるガブリエラ・マルチネス女史が嬉泉の各事業所を訪問されました。現在同センターでは、我が国の国際協力事業団から派遣された嬉泉の旧職員の山崎さんが石井哲夫所長のスーパービジョンのもとに受容的交流療法の実践を試みています。

今回、袖ケ浦のびろ学園・袖ケ浦ひかりの学園では、職員の全体打合わせ会で講演と質問会をしてくださり、また、懇談会でもなごやかな雰囲気の中、活発な意見交換がなされました。中でも、「メキシコの隣国アメリカよりも日本の方が文化に共通性があり、感性も近いものがあるので、日本に学びたい」というお話しがとても印象的でした。

また、折しも開催された、袖ケ浦のびろ・ひかりの学園合同の「こいのぼり大会」にも参加され、広場に集結した百名の自閉症児者が落着いて楽しく過ごしていた様子にはとても感動したようです。

二週間にわたる袖ケ浦と世田谷の学園の実際の生活場面や指導場面に接して、受容的交流療法に学びたい気持ちがさらに強まったとのことでした。

今回の来日は、メキシコで抱えていた様々な問題の打開が主たる目的のようでしたが、帰国に当たって、「自分が新生したようだ、メキシコは日本よりはるかにテンポが遅いが未来への展望が開けました」と明るい言葉を残してくれました。

(川相　豊子)

嬉泉の全職員研修

社会福祉法人嬉泉の全ての事業所の全ての職員参加による研修が今年も去る三月三十一日から三泊四日で開催まされました。

三年前からこの研修に向けて「嬉泉白書」が印刷されるようになりました。内容は、嬉泉の歴史と目的から始まって、役員と経歴、法人の資産、諸規程、法人組織図、法人年間事業そして全職員の名簿で綴られています。「白書」はもっぱら新人職員のオリエンテーションを目的に作製されていますが、一般職員にとっても一年に一度法人の寄って立つところに思いいたす機会になっております。

今年は例年になく早く新年度の人事の発表が初日になされましたので、各事業所の療育現場だけでなく、事務会議は勿論のこと厨房の打合わせ、雇用員の打合わせ等私たち法人の仕事を日々遂行している全ての職員が参加して打合わせを早々に開始しました。

また、今回は主任の職員の圧倒的な希望により、初めてスポーツ大会が行われました。担当になった職員は初日から企画に追われ、何しろ百数十人の参加者ですから、一時は町営のグラウンドを全て借りきってしまおうという意見も出たほどです。結局は一チーム二十人からなるソフトボール大会や卓球大会、バドミントンにサイクリング、ハイキングと思い思いに好天に恵まれた一日に汗を流しました。

(友田　篤)

町役場でのパン販売

袖ケ浦のびろ・ひかりの学園では、学園の利用者や園児の人達が、積極的に地域へ出ていってパンの販売活動をしています。販売しているパンは、学園のパン工房で利用者の人達が毎日作っている焼きたてのとてもおいしいパンです。

販売している人達のグループは、これまでに三つになりました。地域のスーパーの店頭での販売グループ、地域を毎日回っている巡回販売、そして長浦駅の構内を借りて販売している駅販売です。

この三つのグループに加えて、この4月から袖ケ浦町役場での販売を始めました。町役場の方々の

ご好意で、昼休みのロビーを提供してくれることになったのです。

今のところ毎週火曜日だけですが、新しく開発された調理パンを主体に初めています。当初、こちらの宣伝不足でお客さんの出足が鈍かったのですが、回を重ねるごとに馴染の方も出来てきて、調理パン以外の注文が出てきたりして少しづつ浸透してきましたのでこれからに期待しています。今後パン工房の人達にも頑張ってもらってパンの量と種類を増やしながら、販売という活動を通しての利用者の人達の社会参加と地域の方々との交流をますます盛んにしていきたいと願っております。（友田　篤）

ひかりの学園華道部

昨年度の終わり頃から、中塚園長の指導による生け花のお稽古が週一回夜の自由時間を利用して始まりました。

「やすらぎグループ」の女性利用者を中心に、「あゆみ」の飯田さん、「みのり」の小原君が参加しています。

初回、中塚園長が説明しながらお手本を見せてくれたのですが、なかなか難しそうです。さて、皆さんどうするのだろうと、不安と恐れと少しの期待を抱いて見ていると、意外と物怖じなど全くなく、大胆にパチンパチンと手にしたはさみで花を切って、オアシスに突き刺していきます。「針山」のようになってしまった作品を園長に一人一人手直ししてもらい、すっかり美しく出来上がった花カゴを手に、皆、大満足。メンバーの笑顔も花開きました。

こうしてスタートした生け花も、四月からお弟子さんたちが増え、二班に分れて、メンバーは隔週で参加するようになりました。道具も本格的な花器と剣山を使うようになって、いよいよ一人一人の個性が現れ始めています。とことん自分の世界を追求しようとする山中さん。分からないと思うことはすぐその場で質問せずにはいられない良江さん。本当に楽しそうに、でも切ったあとのいらない茎まで生ける柴田さん。太い枝はまだ切れないけど、じっくり眺めてじっくり生けていく大山さん。

「お花たべちゃうよ、見てごらん。」とおどけているかと思えば難しいお花の名前もちゃんと憶えて答えてくれる中村さん。いざ始まると一生懸命熱中して少しでも暇があくと小枝を切ってハサミの使い方を練習（？）している宇佐見さん。細かい部分にも気を配って研究熱心な飯田さん。そして、唯一人男性参加で頑張ってきた小原君は、近頃、花を持つ姿が様になってきました。

一方、出来上がる生け花の方はというと、これまた個性にあふれていて、「私が教えているのは池坊なんだけどねえ……」と中塚園長の一言。とても合格点はいただけそうにありませんが、皆が毎週この時間を楽しみに興味を持って参加しています。

そして、五月からは、かねて希望していた女性職員の皆さんが加わり、中塚園長はいよいよおおもて。ますます盛況になっていく「ひかりの華道部」です。

（永田りつ子）

職員の思い

グループホームでの生活

島田　千夏

N君は、普段は八時半から九時までお茶を飲みながらおしゃべりし、九時から十時まで入浴、十時半頃に寝ています。たまたま都合でお茶の時間が待てなかったところ、本人はどうしてよいか分からなくなってしまったようです。日頃落ち着いて生活しているようで安心して見守ってきたN君が、思っていた以上に日常のささいな生活パターンに支えられて生活していること、そのパターンがくずれると自分で考えたり判断したりして対処するということができないんだと実感しました。N君は、家事能力も高く、生活も安定しているように思っていたのですが、やはりホームの生活の中で見えてきたこうした点については、きちんと援助してあげなければならないと改めて考えています。

今日はN君の三十一歳の誕生日でした。この日は入居者が初めて三人そろうということもあり、ケーキと果物と飲み物を用意しお祝いしてもらって嬉しいというよりは、人が多くて話しを聞いてもらえたことが嬉しかったようです。K君は、前日からお願いしておいた給仕をよく手伝ってくれました。Y君は、これまで緊張や不安で固い表情だったのですが、人が大勢いてにぎやかで楽しい雰囲気が良かったのか、ずい分くつろいだ表情で過していました。。今後とも入居者が増える時、折りにふれ行事を計画して皆で楽しい時間が持てるようにしていきたいと思っています。また、誕生会の前後を通し、ひとりひとりの世話をしたり、気にかけたり、リビングで各々が夜十時までくつろいで過ごしている姿を見たりして、やはり皆が揃うとグループホームらしくなると感じています。

(グループホーム世話人)

思うこと

渡辺由美子

この仕事に入って二ケ月になります。自閉症児・者と接するようになったのは初めてですが、余り違和感なく溶けこむことができました。

私は七年間大学で文学をやっていて、常識とか社会通念にとらわれず人間を観る目を養ってきたつもりでありますが、ここに来てからまだまだ自分は甘いなと反省させられました。

彼らから教えられることは多いです。「社会」とは、「常識」とは、「倫理」とは一体何だろう、と考えさせられることしきりです。

彼らが示す言葉も、人間としての一つのあり方(姿)であり、それを社会通念でもって規制したり裁いたりするのではなく、先入観を捨ててその子の気持ちになってみる、ということが、いかに大切か、ということを改めて感じました。今よりもっともっと人間に対して多面的な見方ができるようにならなければ、と思いました。

子どもの処遇に関しては、まだまだ先輩方の実践を見て学んでいる段階で、自分としては子どもの身の回りの世話(掃除や衣類の着脱のお手伝い)をしている程度ですが、一緒に生活しているということで、ある種の連帯感というか、家庭的な愛情が芽生えてくるもので、掃除とかにしても仕事でやっているという感じではなく、一緒に気持ちよく生活するための自然な行為としてやっています。

早く子どもの性格やくせをつかんで、子どもの気持を理解したうえで対処できるようになりたいです。

(袖ケ浦ひかりの学園)

『実習生の感想文より』

日本女子大学　阿萬由紀子

袖ケ浦のびろ学園、ひかりの学園で実習させていただいた中で、私が最も素晴らしいと感じたことは、お子さん一人一人の気持ちや健康、成長について、実に親身になって考慮されている点です。例えば部屋のつくりとか(何人部屋で寝るかなど)、選択制で個々の興味や能力によって臨める作業のシステムや、食事の形式などにそれが感じられると思いました。

また、受容的交流療法について、実際の生活の中で実践を目の前に見、そして先生方に説明していただくことで、その理論が以前よりずっと自分の内にわかりやすく具体的に知ることができ勉強になりました。初めはやさしく受容し、相互に関係づくりがなされた後でこちら側の指示が入るようにしていくとのことですが、現在、良い状態でいらっしゃる園生の方が、そこに至るまでには、職員の皆様の大きな努力や工夫がなされてきたということをお聞きし、あらためて療育の難しさ、自閉症という障害の困難さ、二次的障害の深刻なこと等を教えていただきました。

ひかりのタイムス

独立第10号

外食シリーズ

『すえひろ5』ストーリー

山中　和栄

今日、永田先生と、竹内先生と、ゆっこちゃんと、衣ちゃんとそして私の5人で行きました。私が、メニューの通りでビーフピザとチョコレートパフェを注文しました。永田先生のメニューのコーンサラダを私と2人で、食べました。私がビーフピザをこぼさず食べました。

チョコレートパフェも食べました。次回の外食は「デニーズ」の予定です

（袖ケ浦ひかりの学園利用者）

『外食について』

工藤由木子

その前のデニーズレストランはラーメンとポテトサラダとばななチョコレートサンデーでした。

2回目はすえひろふぁいぶでした。永田りつ子先生と竹内先生とうさみきぬこさんと山中かずえちゃんでした。

1回目のデニーズは若林先生が中華丼で中村すやこちゃんがスパゲッティミートソースとプリンでした。すえひろふぁいぶはきぬこちゃんがステーキとオレンジジュースで竹内先生がビーフカレーで永田りつ子先生がビーフストロガノフで山中かずえさんがピザパイとチョコレートパフェーでくどうさんはチキンマカロニグラタンとコーンサラダでした。その次はすかいらーくにいこうと思います。前回は喜多先生とあきやますみえさんと吉原夏子さんと大山のりこさんはおそばやさんにいきました。

（袖ケ浦ひかりの学園利用者）

『外食のこと』

秋山良江

今日、久々に外食出来て良かったです。また今度もいつか外食をしたいです。

今日、私はデニーズへ外食に行き、ポテトグラタンとオニオングラタンスープとフルーツパフェとストロベリーシェイクを食べました。でも、前の外食の時はオランダ屋に行きました。

また、さ来週も外食があるので、今度の外食の時もどこかへ行き、食べたいと思います。

でも、どこか他にレストランがあれば、そこに行きたいです。

（袖ケ浦のびろ学園利用者）

『A子さんとの出会い』

中西幸一

やすらぎの部屋のリネン室の中でA子さんと一緒に居た事がとても楽しかったでございます。

やすらぎの部屋リネン室の中に、A子さんと一緒にいてレコードを聞けた事も本当によかったでございます。

いままでの間、ひかりの学園に居た時は、夜もやすらぎの部屋にA子さんと一緒に居た時がありました。

女の子の部屋で友達と話した時はやすらぎの部屋で、A子さんと話した事がはじめてでございます。私はパジャマ姿を見られた事に対してやすらぎから反応がなかったでございます。

キャーエッチと反応の言葉と今までの間に縁がありませんでした。

反応がない世界のようでした。仲尾定子さん（注・職員）の話しでは男の子が来たとは思われてないのではないかという事でございました。

A子さんとははじめて会った時と比べて、今は気持ちの通じ方がよくなったようでございます。

いつになるかわからないけれど、やすらぎには復帰したい。路線バスのように見られたい。

路線バスは他の車から交差点の右折を除外されるように他の男がやすらぎに入る事と別としてほしい。やすらぎの部屋をA子さんと一緒に居る事を認めてみらえなければ　バザーの時食堂にお金を

木工部の作品（ベンチ）

払って食券の食べ物を食べたくありません。バザーの日はお弁当持参で来るようにしたいです。

バザーの時食券の条件と、やすらぎの部屋に私とA子さんと一緒に居る事を認める事と交換条件から手離したくないのでございます。やすらぎの部屋に私とA子さんと一緒に居る事を認めないという事は基本的人権の自由を無視した事のようであると見て居ます。

（グループホーム利用者）

あゆみ組で、すかいらあくのレストランに、行った事

田中　雅也

平成二年四月二七日木曜日

この平成二年度の四月になってから職員が友田篤先生と川相豊子先生と仲尾正先生と大川正美先生の四人組から、新メンバーの金沢裕子先生と中山和也先生と矢沢恭子先生と渡辺由美子先生の四人組に、入れ替えが有った。

あゆみ合同の顔を合わせるのは、めったに無いから、この日は、袖ケ浦福王台に、有るレストランに行きました。

喜多克彦先生が運転するいすずV一〇の観光バスが往復でした。

この新メンバーのあゆみの職員は、女性が多いし、男性で大型車の自動車運転免許を持っている先生がいません。

はたおり工房の看板（ひつじ）

喜多克彦先生は、グループは、無いのです。

他に、男性職員で　学園の公用車が運転できる、学園生を載せることができる石井所長から、所長検定の受けた先生もいません。

このごろは、ひかりの学園の園生は、やすらぎもさきがけもみのりも外食をしているのを見て、うらやましいように感じた。

この日は、雨が降ったのがつまらない、残念でした。

のびろ学園の職員とひかりの学園の職員は、あゆみのレクリエーションとして電車外出も考えています。でも鉄道ばっかりは、あきる為、つまらないし、電車利用は一人でできるから、電車外出は反対です。

僕は、千葉県袖ケ浦町に、のびろ時代から住んで、この三月一日で、十一周年が過ぎましたけれど、ひかりの学園が創立する前の昔は、毎日ドライブ毎週外食、毎日ドライブを千葉県内をしたのは、家庭でできない楽しみがミスター先生が担当の時の思い出だから、このひかりの学園では、外出の時は、ひかりの学園のバスが良いです。集団外出の時は、バスが良いです。

この日は、中西幸一さんが参加したのが良かったです。この彼はあゆみのメンバーの仲間です。

この彼は僕と仲の良い親しみの有る人です。

私は、これからとしたら、木曜の実家へ帰る日に、南では木更津だけ、東京の方向の千葉のレストランとか千葉の寿司屋とか柏の食堂とか船橋の食堂へひかりの学園のバスで、帰りに、行って、見たいです。潮干狩は、一回で、飽きてしまった。

集団外出は必ず、ひかりの学園のバスにしたいです。これまでです。（袖ケ浦ひかりの学園利用者）

《編集後記》

編集を夜、責任者の友田氏と利用者の私が相談しながら黙々とやった。いつも思う事だが記事というのは編集する側が記事のスペースとか考えて文を削り添削してまとめる。その過程で印刷されてただの客観的事実として載る。制約をうけた中で報道される。

そういう洗礼をへて情報はたれ流される。書かれた側の視点のみが強調される。それがメディアという物の本質なのかもしれない。

ワープロを打ちながらそんな事を考えて見た。読者はメディアの選んだ情報を消費しているに過ぎない。

（山岸　裕）

と、ご立派なメディア論を山岸氏は述べておられるわけですが、ワープロの清書も一行十五字のレイアウトをようやくマスターしつつある段階。わずか二ページの編集作業ですら、まだまだとてもとてもおぼつかないのが実態です。と、敢えて付け加えておきましょう。

遙かなるかな自立への道（山岸君はワープロで身を立てたいと思っているのです）。ご賢察のほど。

（友田）